

いっばい遊んで、いっばい転んで  
雲ひとつない晴天が広がっている。まさに  
フリーマーケット日和だと奮い立ち、五平米  
にも満たぬブーススペースに雑貨を並べる。  
「今日はよろしくお願いします。子ども服の  
お店なんですネ」  
私と同じく一人で出店しているらしい、右  
隣のブースの女性に声を掛ける。悦子さんと仰  
るその女性は、小さなシャツを大切に畳  
みながら、にこやかに頭を下げた。  
フリマ出店が趣味になりもう二年が経つ。  
最近ではお客さんとのコミュニケーションは  
もちろん、近隣出店者との会話も楽しみのひ  
とつとなっていて。女性一人で出店するとな  
ると、お手洗いにいくのでさえ誰かの協力が  
必要だし、何より六時間もの長丁場、セール  
ストーク以外の世間話をしたいい時もあるのだ。  
「だいぶ風ぎましたね」  
悦子さんとお喋りする余裕も出来始めた。

「私フリマ初心者なんです。その上一人だから不安だったけど、楽しいわ」

悦子さんの左薬指に光る指輪を見て、今日は旦那さんは、と尋ねる。

「多分家で寝てるわね。よく寝るからか、身長だけは高くて。おまけに痩せぎすで黒縁眼鏡なんか掛けているから、あだ名はウォーリー」

くすすす笑いながら悦子さんは、やっぱり商品を丁寧に畳んでいる。悦子さんのブレスに隙間なく陳列されているのは、見ただけで女の子の服だと分かる、カラフルで可愛らし

いデザインのものばかりだ。

「娘さん、今お幾つなんですか」

悦子さんは次のスカートに取りかかりながら、七つ、と答えた。

「生きていたらね。小学校に上がる前に、天国に行ったの」

悦子さんのひっそりと物静かな横顔を前に、しばらく言葉が出なかった。

「服、売っちゃっていいんですか」

悦子さんは穏やかに頷いた。  
「あの娘が亡くなってから、私毎日あの娘の服を洗濯していたわ。春だから淡い色のスカ―トを、今日は寒いから厚手のフリースをつて、365日欠かさずコーディネ―トして。でもある時気付いたの。過ぎていく季節に合わせてあの娘の服を考えても、服のサイズは五歳のままなの。私の手の皺は深くなるけど、あの娘がランドセルを背負うことは無いの。」  
その時やっとな前に進まなきやっと思つたの。そう呟く彼女の声は、凜とした意思に満ちていた。  
「あの娘の服を売って決めた時、夫は大反対したわ。お前はあの娘の思い出まで奪うの。か。つ。て。今日。の。朝。だ。つ。て、俺は絶対フリマには行かないからな、つてまだ反対してた。」  
でもね、と続けて悦子さんは前を見据える。  
「奪うわけじゃないわ。もちろん捨てるわけでもない。この服達を別の子が着て、あの娘の分まで、あの娘ができなかった遊びや学び

をしてくれたらって思ったの。その方があの娘も喜ぶと思っただの」

その時、一人の女の子が悦子さんのブースの前にしゃがみ込んだ。赤い水玉のスカートが気に入ったのか、小さな手に取って持ち上げている。スカートならさっき買ったでしょ、と後ろから母親がたしなめる。

あげる。その様子を見つめていた悦子さんが、にっこり笑ってそう言った。

「御代は結構です。その服差し上げます」

まあ、いいんですかと母親が驚きながら礼を言う。そして、あなたもお礼を言いなさいと娘の背中を押した。

「ありがとうございます。大切にします」

悦子さんは、舌足らずに感謝を伝える女の子の頭を撫でた。

「大切にしないでいいよ。いっぱい遊んで、いっぱい転んで、破れちゃってもいいよ。この服がすぐに着られなくなるくらい、大きくなるんだよ」

穏やかな顔でそう言つて、スカートを畳む。そして一度ぎゅっと胸で抱き締めた後、母娘に手渡した。それは決して、哀しい別れではなかつた。また遊ぼうねと亡き娘に、スカート越しに語りかける悦子さんの心の声が確かに聞こえた。日も暮れ始め、フリマは終わりを迎えた。悦子さんの子供服はほとんど売れたようだった。相場の半分ほどの安価で販売していたので、出店料を差し引けば儲けはごく僅かだろうけれど、彼女の表情は晴れやかだった。早く仲直り、しなきやー  
小銭入れから視線をあげた悦子さんの言葉が詰まる。終始穏やかな顔で接客をしていた彼女の目尻に、初めて涙が滲んだ。視線の先を辿ると、長身瘦躯の男性が立っている。黒縁眼鏡の奥の目が、赤く潤んでいる。春の訪れを感じさせる柔らかかな夕方が、すぐそばまで来ていた。